川越市青少年を育てる市民会議

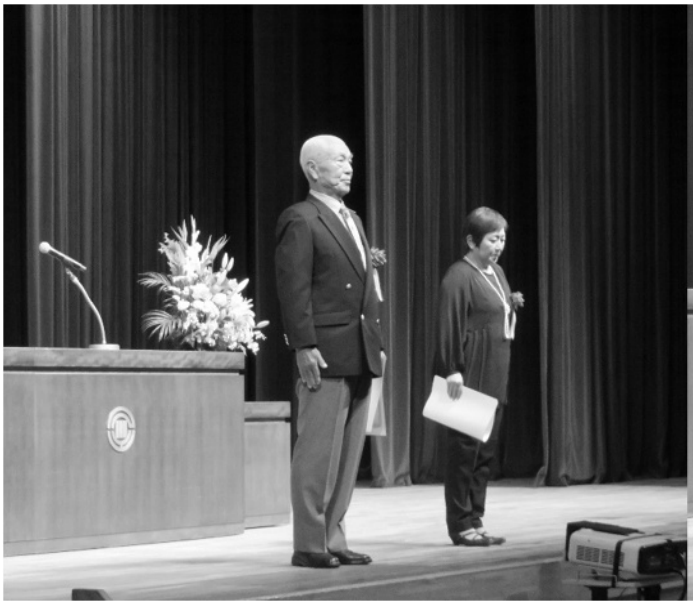
令和７年２月１日（第５０号）
発　行　川越市青少年を育てる市民会議
事務局　川越市こども未来部こども育成課
ＴＥＬ　049-224-5724（直通）

昨年11月16日(土)、川越市やまぶき会館ホールを会場に、「第40回青少年健全育成川越市民大会」を開催しました。

この大会は、青少年育成関係者が一堂に会し、総意を結集して活動の一層の推進を図ることを目的に毎年開催しているものです。2 ページ以降で、この大会の様子をご紹介します。

写真左：少年の主張作文受賞者の皆さん
写真右下：感謝状　大野重さん
写真左下：かしの木褒賞　渡邉三郎さん（左）・今井真由美さん（右）

第40回 青少年健全育成川越市民大会を開催しました



大会は、県立川越南高校放送部の皆さんによる進行で進められました。主催者として栗原薫副市長、青少年を育てる市民会議宮岡寛会長のあいさつ、来賓あいさつに続き、感謝状の贈呈、青少年育成活動顕彰（かしの木褒賞）・少年の主張作文入賞者の表彰を行いました。

表彰の後は、少年の主張作文最優秀作品の発表と新保正俊教育長による講評、第二十回川越市少年の翼事業の体験報告が行われました。研修生代表・富士見中学校三年の守屋橙子さんが、川越での事前研修や、本研修が行われた北海道での体験を報告してくれました。

司会を務めた川越南高校の皆さん

ガールスカウト川越地区協議会の荒木紘子さんにより大会宣言が提唱され、来場者の拍手で承認されました。大会の締めくくりには、青少年活動事例発表として、司会進行を行った県立川越南高等学校放送部が制作したラジオドラマの作品発表が行われ、約二百五十名の方に来場いただいた市民大会は、盛況のうちに終了しました。

大会宣言を読み上げる荒木さん

感謝状

市民会議の運営に尽力いただき、その功績が顕著な方に感謝状を贈りました。

あいさつをする宮岡会長

青少年健全育成川越市民大会で表彰された方々をご紹介します。（敬称略）

◆個人（二名）

大野　重（川越市青少年を育てる古谷地区会議）

中田　秀之（川越市青少年を育てる川鶴地区会議）

青少年育成活動顕彰「かしの木褒賞」

青少年の健全育成に尽力し功績顕著な成人の方に、市の木にちなみ名付けられた「かしの木褒賞」を贈りました。

◆個人の部（二名）

渡邉　三郎

今井　真由美

◆団体の部

該当なし

青少年地域活動顕彰「やまぶき褒賞」

明るく住みよい地域社会をつくるため、健全な地域活動に励んでいる善行青少年に、市の花にちなみ名付けられた「やまぶき褒賞」を贈呈しておりますが、今年度の該当者はおりませんでした。

少年の主張作文

少年の主張は、次代を担う青少年が日々考えていることや夢、希望を作文にすることで、同世代の意識啓発と青少年に対する市民の理解と関心を高めることを目的に今回は、千百四十編の応募があり、その中から入選作品十六編を、本大会で表彰しました。また、最優秀賞受賞者による朗読が行われました。

◆中学生の部

最優秀賞（全文三頁に掲載）

○音楽とともに
　嘉手川　葉名　野田中三年

優秀賞

○作られたカテゴリーを超えて
　北方　那奈美　芳野中三年

○正しく恐れる
　長島　恵斗　寺尾中二年

○助け合いの輪
　平野　愛佳　霞ケ関東中三年

入選

○高校生になる、私からのメッセージ
　宮地　里佳　富士見中三年

○自分で決める将来
　河合　舞浬　野田中二年

○個性の尊重とコンプレックス
　久保　美乃莉　野田中三年

○ラジオを聴くようになって
　守岡　珠唯　野田中三年

○音楽の力で
　岡田　恭太郎　東中一年

○私の野球人生
　長南　結衣　南古谷中三年

○森林を守る第一歩
　長谷部　莉央　川越西中一年

○祖父の挑戦
　岡山　芽未　秀明中二年

○孤独と自立と一人の時間
　秋本　梨央奈　秀明中二年

◆高校生・一般の部

入選

○自分を考える
　吉澤　あい　秀明高一年

○限り
　冨澤　心暖　秀明高二年

○「人生は出会いで決まる。」
　原島　沙英　秀明高二年

少年の主張作文　中学生の部　最優秀賞

音楽とともに

野田中学校三年　嘉手川　葉名

四年ほど前、世界中で新型コロナウイルスが流行したときのことを覚えているだろうか。今ではほぼ、コロナ禍前の生活に戻っているが、当時はいろいろなことが自由にできなくなった。そのとき私は、大好きな音楽が不要不急となったことにショックを受けた。しかし、音楽はこれをきっかけに無くなるようなものではなかったのだ。

私は、昔から音楽が大好きだ。小さい子供にはよくあることだが、私自身、その場で思いついた歌を大声で歌ったり、アイドルに憧れて曲に合わせて踊ったりすることをよくしていた。今ではバンドに魅了され、気分に乗せて曲を聴いたり口ずさんだりしている。私の性格は飽きっぽい。自分で計画を立てた勉強も、体力をつけようと始めた運動も、順調に取り組めたことはあまりない。興味を持ったこともすぐにやめてしまう。私にとって三日坊主は良い方なのかもしれない。しかし、音楽だけは違った。音楽だけは唯一、小さい頃からずっと、「好き」が続いている、私にとって特別なものなのだ。

その音楽への想いをさらに強くしたのが、吹奏楽だった。

吹奏楽部として活躍したいと思ったのは、部活動見学で先輩方の演奏を聴いたとき。中学校に入学する前から、吹奏楽部に憧れを抱いていたものの、間近で楽器の音を聴いたのは初めてだった。教室全体にいろいろな楽器の音が広がっていく、不思議な感覚がしたのを覚えている。そして、何より演奏している先輩方がかっこよかった。私も音楽を奏でる側になりたいと感じた。

楽器を演奏することは、もちろん簡単なことではなかった。私が担当していたトランペットは今までに経験がなく、できるようになるまで時間がかかった。引退した今でも、自分の演奏はまだまだだと思うほどだ。音域はなかなか広くならず、そこに表現をつけることが大変だった。私が苦手な、コツコツ続けるということは必須で、投げ出しそうになることもあった。

それでも私は、吹奏楽を続けてこられた。それは、音楽を奏でる立場としての楽しさを知ったからだ。練習は上手くいかないことの方が多かった。でも、それぞれの楽器の音が合わさり、自分たちの気持ちも一つになる演奏ができたとき、抑えきれないくらい、気持ちが高ぶるのだ。この瞬間はいつも楽しさで満ち溢れている。そして、私たちの演奏を聴いて、良かった、すごく楽しかった、と言ってもらえることが本当に嬉しい。私たちの音が自分だけでなく、聴いている人の気持ちも動かしていることを実感する。この気持ちは、こちら側に立ったからこそ感じられるものだと思う。この楽しさを知ってから、私はもっと音楽を身近に感じるようになったのだ。

ウイルスで自粛が続いていた当時、自宅で歌っている動画を投稿する歌手がいた。この時期に出した曲が評価され、大活躍するアーティストもいた。私は、このとき音楽の力を目の当たりにして驚いた。音楽を求めているのは、自分だけではなかった。

今、吹奏楽の経験を経て、このときのことを振り返ると、音楽を通して人との繋がりを感じたかったのだと思う。部活で演奏していたとき、私は、いつも以上に周りの人の存在を感じていた。一緒に演奏している仲間、先生、そして聴いてくれている人と音でコミュニケーションを取り合っているようだった。音楽には、人と人を繋げる力があるのではないか。だから、音楽が止まることはなかったんだと私は思う。

音楽は今、ボーダレスになってきている。同じものを、国を超えて一緒に楽しめるのはとても尊いことだと思う。音楽が、もっとたくさんの場所に広がって、世界共通の言語のようになったとしたら。きっと、人と人との繋がりも広がっていくはずだ。これから先も、音楽がずっと鳴り続ける世界であってほしいと私は願う。

少年の主張作文教育長講評（要約）

昨年度と比べて２００編以上多い応募があったと伺っています。日々疑問に思っていることや様々な体験から学んだことについて、自分の考えをしっかり持ち、自分の言葉で主張している作品が多く、とても読み応えがありました。

最優秀賞、嘉手川さんの作品は、新型コロナウイルス感染症の流行の中で、様々な制限をきっかけに、大好きな「音楽」について考え、音楽は歌う楽しさ、奏でる楽しさという行動に止まらず、「音楽を通して人とつながりたい」「音楽には人と人をつなぐ力がある」という、書き手の思いが伝わる作品でした。改めて、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を育むことが、いかに大切な事であるかを実感することができました。

第二十回川越市少年の翼体験報告（要約）

研修生代表　富士見中学校三年　守屋　橙子

私たち四十七人の研修生は、北海道の文化や歴史、農業はもちろん、グループワークや共同生活を通して本当に多くのことを学ぶことができました。また、この研修だからこそできる貴重な経験もたくさんありました。

事前研修では、市立美術館・博物館の見学、川越の課題についての話し合い、ディスカッションなどを行いました。話し合いやディスカッションでは、各班で意見を出し合い、普段の学校での話し合いより、たくさん意見が出て、内容が深まっていったことに驚いたのを覚えています。初めて他の研修生と顔を合わせたときは、みんなの凛とした姿を見てとても緊張していましたが、三回の事前研修を通して仲を深めることができました。

そして出発の日、これから始まる本研修に胸を膨らませる一方で、多少の不安や緊張の気持ちも……。バスや飛行機の中ではバスレクをしたり友達と話したりして盛り上がり、あっという間に北海道に到着。帯広百年記念館を見学し、アイヌ古式舞踊体験では、アイヌの方の話を聞き、文化を学ぶことができました。普段できない経験なので、今回体験できて良かったです。

二日目、牧場で子牛を触ったり、草刈り用の機械に乗ったり、アイスクリーム作りをしました。アイスクリームは同じ材料なのに、各班で味が違い驚きました。農場では、じゃがいも掘りをしました。その時にいただいたじゃがいもは、今まで食べたじゃがいもの中で一番美味しかったです。来村歓迎会では、ポロシリ太鼓振興保存会の皆様による演奏を聞きました。大迫力で、とても印象に残っています。

三日目、中札内村の中学生と、モルックというスポーツで交流を深めました。相原求一朗美術館では、作品を見れば見るほど細かい工夫が見つかり、「すごいなー」と改めて思いました。パークゴルフは班を入れ替えて行い、あまり話したことがない人とも、やっているうちに仲良くなることができました。そして、ウタリ祭。ウタリとはアイヌの言葉で、仲間という意味。各班でダンスや劇を披露。短い準備期間だからこそ、班の団結力を高めて練習をすることができました。それぞれの班の良さが出て、とても盛り上がりました。最後に、全員で肩を組んで、テーマソングの「青と夏」を歌いました。私はこのときのことが一番印象に残っています。歌っているときには四十七人全員が一つになったように感じ、ここにいれて幸せだなと思った瞬間でした。

そして、最終日。四日間は本当にあっという間で、みんなと活動できるのが最後だと思うと悲しかったです。北海道最後の見学先は、ばんえい牧場十勝。大きなばん馬に餌をあげ、牧場についてのお話を聞きました。羽田空港からの帰りのバスでは、一人ひとり感想発表をして、みんなで最後の「青と夏」を歌いました。

事後研修では、体験報告、ディスカッションの発表、研修生の感想発表を行いました。ディスカッションは事前研修から各班で準備をし、地球温暖化の影響や野生動物との付き合い方などについて発表しました。事後研修のあとには、みんなでポロシャツに寄せ書きをしました。

私はこの研修で人生のあとにも先にもない経験ができました。代表として活動して、わからないことや一人ではできないこともありましたが、周りの友達がサポートしてくれて、改めて友達の大切さに気付かされました。また、この研修を通して、出会いと感謝の大切さを改めて学びました。これからは一つ一つの出会い、出会ってからの一瞬一瞬、些細なことへも感謝していくことを大切にしていきたいです。そして、研修を通して学んだこと、経験したことをこれからいろいろなところで活かしていこうと思います。